

第Ⅱ部門

「非日常」の魅力を有する水辺空間整備に向けた水辺評価に関する一研究

大阪市立大学工学部 学生員 ○奥田砂由里

大阪市立大学大学院工学研究科 正会員 内田 敬

大阪市立大学大学院工学研究科 フェロー 角野 昇八

1. 研究背景・目的

我々の日常生活において「非日常」を感じることでできる瞬間は、単調な日常にメリハリをつけることができる重要なひとときである。嶋根ら¹⁾も、生き生きとした現在を作り出すものこそ「非日常」だとその重要性を示し、さらに「非日常を生み出す文化装置」として音楽経験や旅行などがあるとしている。都市内の「水辺空間」も、訪れることによってそこにいる時間が「特別な時間」となり、気分転換になったり、気持ちが落ち着いたりすることが多いに違いない。すなわち、日常的な現実とは異なった魅力を発揮する存在ではなかろうか。それゆえ、水辺空間で「非日常」を感じさせることができるような空間整備をすることは、意義のあることだと考えられる。しかし、「非日常」を感じさせることを十分に意識した水辺空間整備が、未だなされていないのが現状である。

本研究では、「非日常」を与える水辺空間構成要素の抽出を試みるとともに、それに基づいて「非日常」を感じることができる魅力ある水辺空間の評価と整備の手法を検討して提案する。

2. 研究方法

水辺空間に存在する「非日常」を与える要素を抽出するために、現地調査を行った。調査対象地は、大阪の都市部における20箇所および大阪府とは異なる地域で著名な水辺空間5箇所の計25箇所の水辺空間とした。

本研究では、嶋根ら¹⁾にならいい、「非日常とは連続した流れを断ち切るものであり、断ち切り

ながら感情を変化させるもの」と定義した。なお、快の感情を与えるものを「正の非日常」とし、不快の感情を与えるものを「負の非日常」とする。

3. 調査結果

調査地点の水辺空間の構成要素ごとに「非日常性評価」を行った。その結果を表-1に示す。

調査水辺空間とそれを構成する水辺空間要素ごとに評価結果を記し、評価は◎（正の非日常）、●（負の非日常）、×（非日常を阻害する日常）、■（日常）の4

表-1 水辺空間構成要素についての非日常性評価

水辺空間構成要素			水辺空間																								
大項目	中項目	小項目	本郷川（奈良県宇陀市）	淀川河川公園 右岸	清瀬川（韓国ソウル）	淀川河川公園 左岸	住吉公園	大泉緑地	高瀬川（京都府京都市）	大和川 大和川橋	桂川（京都府舞鶴市）	十三間川 a地点	小樽運河（北海道小樽市）	大和川 吾彦大橋	木津川	大和川 河口	住吉川	船場公園	大川	平林貯木場	うるし堤公園	細井川 b地点	内川・土居川	道頓堀川	咲洲キヤナル	細井川 a地点	十三間川 b地点
堤外地	水	透明性	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		川の流れ方	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		水量が多い	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		水量が少ない	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	河道	せせらぎ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		落水	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	川床	川幅が広い	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		川幅が狭い	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	直上空間	石・岩	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		中州（草あり）	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		砂州	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		ゴミ	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
堤内水	低水護岸	草	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		太陽光	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		夕日	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		橋梁	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	高水敷（遊歩道を含む）	高架構造物	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		遊具	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		自然的護岸	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		人工的護岸	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	(高水)護岸	石	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		樹木	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		草	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		広場	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
堤内地	堤防敷（公園内を含む）	砂利道	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		樹木	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		草花	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		柵	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
	堤内地	高層の建物	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		工場	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		その他建物	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		屋敷林	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		山	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎
		電信柱	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎	◎

通りで下した。なお、空白は存在しないことを示している。

以下には、評価結果より分析される、要素が複合して非日常を与える関係性について、その顕著なものを記す。なお、〈〉は、表 - 1 における要素を表す。

1) 〈透明性〉の高い〈少量の水〉が〈せせらぎ〉を作りながら、途中に〈石や岩〉が配置された箇所を流れるとき、相乗的な働きによって「正の非日常感」を与える。さらに、そのような水辺空間では〈石造りの護岸〉および〈植栽〉など、自然らしく整備することが好ましい。しかし、明らかに人工物とわかってしまう〈石〉などは「負の非日常感」を与えてしまう。

2) 〈三面張り〉の人工的な河川において、わざとらしい曲線をもつ一定幅の〈河道〉は「負の非日常感」を与える。

3) 水辺空間において様々な構成要素が影響しあって、我々に「正の非日常感」を与えたり、与えなかったりしている。例えば、一見〈コンクリート張り〉の〈カミソリ護岸〉は「負の非日常」を与えそうなものである。しかし、住吉川などでは「正の非日常」であると評価を下している。これは、周辺が〈工場地帯〉であり、コンクリート張りのカミソリ護岸であるということに、まず「場のふさわしさ」を感じ、より一層工場地帯らしさを強調していると感じたためである。

4. 水辺空間整備に向けての検討

共通の形態的特徴を有する調査点については、そこにある「非日常」を与える要素の組み合わせも同様である可能性が高いといえるであろう。それゆえ、同様の形態的特徴をもつ水辺空間において、一方で存在する「正の非日常性要素」を、もう一方にも再現することで、「正の非日常」の付加が可能になるといえる。なお、ここでいう形態的特徴とは、水辺空間の造りだけでなく、周辺環境も含む水辺空間を構成している全要素をさすものとする。

そこで、本研究で対象とした水辺空間を形態的特徴によりグループ化し、求められる（不足している）「正の非日常」を抽出できるようにした（図 - 1）。グループ化は、水辺空間を堤内側から堤外側にかけて眺めることによって行った。

表 - 1 および図 - 1 を用いることにより、着目している水辺空間がどのグループに属するのか把握できれば、求められる「非日常性要素」を抽出することができる。

例えば、十三間川 b 地点に類似の仮想水辺空間について考えてみる。図 - 1 において、それは船堂公園や十三間川 a 地点、高瀬川と同じグループに属することが分かるので、表 - 1 から他の水辺空間と比べた対象地点の不足要素を把握することができる。この場合、「せせらぎ」などが挙げられるので、対象地点はせせらぎが本来あって然るべきである形態的特徴をもっているといえる。

5. 結論

本研究では、「非日常」の魅力ある水辺空間を評価するための一手法を新しく提案した。しかし、調査した水辺空間は少ないため、十分な量の「非日常性要素」を抽出しきれておらず、まだ手法の提案にとどまっている。

また今後、複数者の被験者によって、同様の「非日常性評価」を重ねることで、より普遍的な評価内容が得られるものと期待する。

《参考文献》

1) 嶋根克己, 藤村正之, 非日常を生み出す文化装置, 北樹出版, 2001

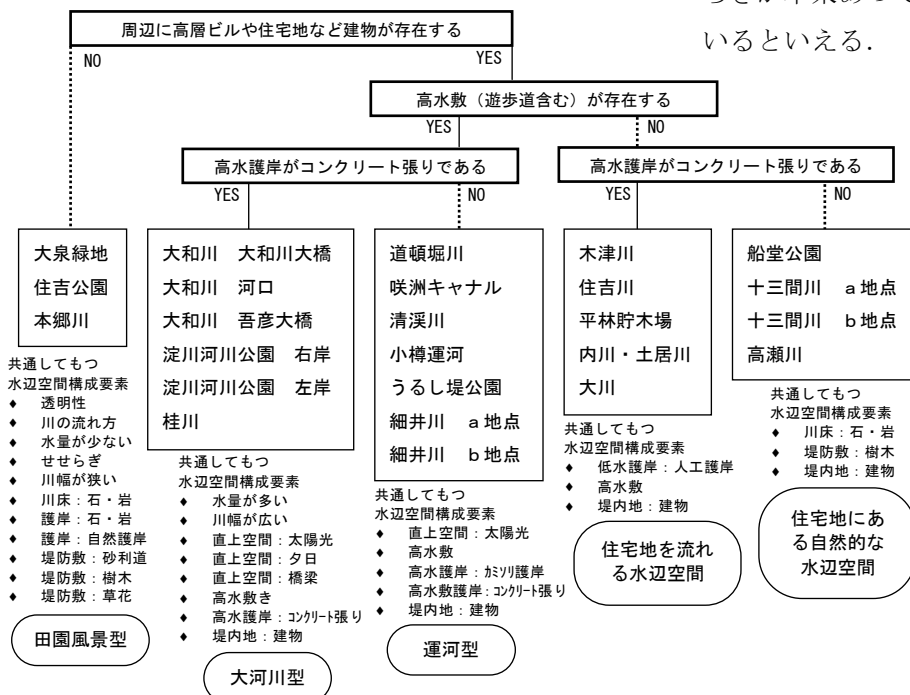


図 - 1 形態的特徴による分類